

# ぶれみあむ みにminute

第12集

”プレミアム・ミニッツ”  
の巻

☆ shiroa ☆

## 十五、プレミアム・ミニッツ

---

パンダマンが胸元をおさえて倒れ込んでいた。

「お、おやじ！」

俺は撃たれる危険も考えず、思わず駆けよった。

「堅ちゃん！」

弁慶が言った。思わず学生時代の呼び名で呼んだのだろう。冷静じゃないのだ。

「きやあああああ！」

ミュウちゃんはその場に膝を折って崩れ落ち、頭を押さえて顔を伏せた。そばに行ってやりた  
いけれど、今はおやじが心配だ。

「すぐには死はない。だが、確実に死は近づいている。どうだ。五分間では自分が生きてきた意味を本気で考えることができなかっただろうが、死が目の前に近づけば、嫌でも考えられるだ  
ろう？　お前はおめでたいヤツだ。これだけ緊迫した状況なのに、自分は死ないと考えている  
。助かると思っている。バカか。結局本当に死が目前に迫らなければ、本気で考えることができ  
ない。どこか人任せな人生を生きてきたんだ。さあ、残り僅かの時間、悔いのないように意味を  
探せ」

エロスが淡々と語る間、俺はパンダマンを仰向けにし、肩に腕をまわして抱えるようにした。  
胸をおさえた手からは、溢れる血の量がうかがえる。早く何か手を施さなければ、本当に手遅れ  
になってしまう。

俺は右手を使ってパンダマンの被り物を外した。何年振りだろう、まともに見る父親の顔は、髭  
が濃く生え、頬はげっそりとおち、想像以上にみすぼらしかった。

「おい、気をしつかりもてよ。ここで死んでどうすんだよ！」

俺は頬を叩き、必死で呼びかけた。

おやじが目を開いた。

「隼人。隼人……、こんな、父親で、わるがつた、なあ」

おやじは力ない声で必死で言った。俺は首を振る。

「父親としての、責任を果たせなくて、ごめん、なあ」

もう駄目だ。死は避けられない。声を聞き、俺は確信した。つんと鼻の奥にこみ上げてくるも  
のがあった。

「責任？　責任なら十分果たしてるよ。俺が生まられてくるまでが、おやじの責任。生れてからは  
、俺の責任。俺の人生が今サイテーなのは、俺の責任だ。おやじのせいじゃない」

堪え切れなかった。涙があふれ出した。本当は大嫌いなおやじだった。今度会ったらどんな酷  
い言葉を浴びせてやろうかと思っていた。けど、この極限状態で出た言葉は、自分でもびっくり  
したけれど、本心だった。自分の言葉で、妙に俺自身が納得した。

そう、俺が今いるこの状況は、俺自身の責任によるものなんだ。

すべてをおやじのせいにすれば、どれだけ楽だろう。けど、本当はそうじゃない。この重い状

況を背負う度胸が必要なんだ。自分で蒔いた種だ。自分で乗り越えないといけない。

「俺、大丈夫だからさ。安心してくれよ」

おやじはほほ笑んだ。よわよわしい笑みだったが、子供の頃、兄弟のようにバカみたいに騒いで遊んだ、その時の事を思い出した。あのとき、俺はおやじのことが好きだったんだ。おやじは俺の友達で、先輩で、いいライバルだった。

「……プレミアム、ミニッツ」

おやじはぼそりとそう云うと、残りの力を振り絞るように口角を上げて笑った。

その笑顔を見て、俺は本当に良かったと思えた。おやじは自分の人生の意味を見つけたんだ。それをはっきりと、自覚したんだ。

笑顔に込められたメッセージは、もう悔いはないということ。俺にはその気持ちが痛いくらい良く伝わって来た。

「隼人殿！ 仇はそれがしが討とう。そのまま堅次殿の傍にて見守っておられよ」

弁慶は立ち上がり、鬼のような形相でエロスを睨んだ。「命がけで参る」。

「さて。そろそろ時間も遅い。次は大男、お前の番だ」

「うおおおおおお！」

弁慶が大地を搖るがすような雄たけびをあげ、傷ついた右足で力強く床を蹴った。

エロスが瞬時に構え、引き金を引こうとする。

ぱん。

「いつつ」

エロスが銃を落とした。

床に、軽い弾が転がる音がする。

弁慶は新たな闖入者の気配を感じてか、その場で勢いを殺し、止まった。エロスは床に落とした銃を素早く拾うと、道場の入り口に向けて銃口を構えた。

エロスの足元には、銀色のパチンコ玉が落ちていた。

☆

レストランでハンバーグを頬張りながら、カエルは言った。

「相手が銃を持ち出したら、例え弁慶がいてもとても勝ち目はないよ。エロスは朝真会館屈指のスナイパーとして館長にも目をかけられていてね。弾とか練習場とか極秘で準備してもらってるらしい。ストイックに訓練されたガンマンを相手に、生身じや流石にね」

「じゃ、絶望的じゃない」

ミユウちゃんはお子様ランチを食べながら言った。いくら見た目が子供だからって、流石に無

理があるだろう。店側だって子供向けのサービスメニューとして用意しているもので、大人が注文しても断られると聞いたことがある。

が、予想に反しオーダーが通ってしまった。

「ちっちっち、雲運運団をあまくみぢやいけないぜ。こっちにも優秀なガンマンがいることを忘れてもらっては困る」

お子様ランチの量でお腹は足りるのだろうか。昼だってまともに食べてないのに。

「あ、そういえば駅でハヤトが撃たれたね。それでズボンのダブルのところに銀玉が入れられてた」

ダイエット……にしてもそれじゃカロリーが。ん、え、俺？ 俺なんか言った？

「へ？」

ミユウちゃんのことを考えていた俺は、頓狂な声を出し場の空気を乱した。きっと俺、疲れてるんだ。

「だあかあらあ。ハヤト駅で撃たれたじゃない。その話よ」

ミユウちゃんが頬を膨らませて言った。なお見た目年齢が低く感じる。……やっぱりミユウちゃんは可愛いなあ。

「ああ、撃たれたね。しかしスゲーよな。射的で二メートルあるかないかの景品当てるのに苦労するって一のに、ビルから俺を狙撃したんだろ。神業だね」

カエルは満足そうにほほ笑んだ。俺は海老フライを頬張った。今食べとかないと、いざというとき力が出ないと困る。だから、緊迫した状況でも食べなければいけないのだ。……疲れのためか、イマイチ緊迫感がないけど。

「だろ？ 射的と一緒にされちゃ困る。ハカセが改造した超精密な銃器を使ってるから、弾は正確にまっすぐ飛ぶようになっている。ヤツは本当にすごい。オリンピックのアーチェリーでもやれば絶対金メダルとるだろうね。銃とアーチェリーは違うっていうかも知れないと。ハカセの銃、シューターの技術が相まって、完璧な狙撃手が生まれたんだ。雲運運団の実行部隊の中でも最も重要な人物だよ」

「へえ、凄いですね。けど、そんな凄い人が力貸してくれるんすか？」

カエルはにやりと笑った。

「もちろん、俺とシューターは意外と仲がいいんだ。一緒にオンラインゲームをするくらいの仲さ。確かに危険な作戦になるだろうけど、ヤツならやってくれる。今から頼んでおけば、少し遅れるくらいでそっちに到着するだろう。そうすればエロスに不意打ちだってできるかもしれない」

俺は少し不安があった。

「けど、もしこの時間、シューターがお風呂入ってたりして連絡がつかなかつたら？」

カエルはコーンスープを飲みほし、言った。

「その時は、運が無かつたと思って諦めろ」

「少し遅くなつて済まない。間一髪だったかな」

背の低い、丸い顔の男が立っていた。丸い目、三角の鼻。その顔立ちは俺にスナフキンを連想させた。黒づくめのスーツ姿に、牧師か女の子が使いそうな黒い肩掛けを掛けているが、着こなしのセンスがいいのか、不思議と違和感がない。彼がシューターなのだろう。

「なんだ、お前は！」

予定が狂つたことに激怒したのだろう、エロスは気違ひ染みた声をあげた。その声に囚われた門下生があからさまにビビっていた。

シューターは俺とおやじの方を見て、残念そうに顔を俯けた。

「はあ。もう少し早く着けば良かったか。パンダマンがやばそうだな。早くけりをつけて医者に連れて行かないとな」

シューターはキッとエロスを睨んだ。

「貴様がエロスだな。俺は雲運団の狙撃手、シューターと呼ばれている。仲間の敵だ。決闘を申し入れる」

そして言葉をつなげた。「貴様が臆病ものでなければね」。

エロスは決闘という言葉を聞き、再び冷静な表情を取り戻した。自分の基準でフェアであることに、忠実な男なのかもしれない。

「俺の銃には一発の実弾が入っている。本当はそこの大男を仕留める為のものだったが、よう。決闘を受ける。しかしいいのか？ お前はそのおもちゃで俺と闘うつもりか？」

シューターは笑った。

「ああ。十分だ。ただし、ただのおもちゃじゃない。ハカセが作った特別製のモデルガンだ」

……本当に大丈夫なのだろうか。不安になってきた。

「若いの、下がっておれ。ここは拙者が……」

弁慶がシューターへ声を荒げて言ったが、シューターは手のひらをぴしりと弁慶に向け、その言葉を制止した。

「任せろ。僕はこうみえても凄いんだ」

まるでやんちゃ坊主のような無邪気な口調だった。

エロスもそれを聞き、決して茶化す様子は無かった。

「お前の腕前は認める。よく急ぎ入つて来て即座に弾を放ち、俺の銃へ命中させたものだ。相当な訓練を行つた手練でないと、無理な芸当だ」

認めているのだ。

「過去、一度ヒットマンと決闘をしたことがある。相手は政治がらみで仕事をする殺し屋で、ベテランだった。が、俺の相手ではなかった。銃を抜くスピード、闇夜で相手の位置を正確に把握する感覚、すべて俺の方が上だった。正直期待外れだったのだ。

お前なら相手にとって不足はないだろう。……俺の実弾が入つた銃、車に行けばあるんだが、それを使うか？」

エロスはあくまでフェアに闘うつもりらしい。

「いや、いい。僕はこの愛用の銃を使う。ちなみに重さは本物の銃と同じ。引き金の重さなども

同じ。確認するかい？」

今度はシューターが言った。銃口を持ち、エロスに向けて銃を差しだす仕草をする。

「いや、信用する。確認の必要はない。先ほど俺は二発撃っているため、引き金を引けば撃てる状態になっている。お前もその状態と考えていいのか？」

シューターが爽やかに笑った。

「ああ、本物と同じだから。では、カウントを弁慶、あなたにお願いしてもいいかな。場所は、この間合いでちょうどよさそうだな」

「間合いが広ければ広いほど、本物の俺の銃の方が弾丸のスピードが速い分、有利なのは癪だな。が、近くても面白くない。この距離なら場所により致命傷を負うぞ。もう一メートル後ろなら、重傷で済むくらいだが、いいのか？」

エロスは自分が有利であることが少し残念な様子だった。

「構わない」

シューターは頷いた。

緊張感で空気が張り詰めていた。

俺の鼓動が激しくなっている。もしシューターが死んだら……。嫌だ。そんなこと考えられない。銃弾がゼロになれば、弁慶が取り押えることができるだろうか。弁慶は怪我をしてずいぶん血を流している。それに、相手は空手の達人でもあるらしい。駄目かもしれない。

シューターが勝たなければ、俺たちはお終いだろう。けど、おもちゃの銃でどうやって勝てるんだ？！

「では、いざ尋常に勝負でござる。拙者の『はじめ』の一言が合図といたす」

シューターも、エロスも、まばたきを忘れたように互いを睨みあう。自分の鼓動がこの道場内に響くのではないかと思うくらい、静まり返っている。

すっと弁慶が空気を吸った。

「いざ、はじめい！」

瞬間、共に腰のホルスターに仕舞っていた銃に手を掛けた。

一瞬、シューターが早かったように思えた。

シューターが構えるかと思いきや、くるりと体を回転させ、右にずれた。

ぱん。

エロスの発砲。

ぱん。

一秒も間を開けずにシューターが両手を差し出すようにして発砲した。

がくり、と膝を落としたのはシューターだった。

「やはり、無傷ではいられなかつたね」

シューターが頬をひきつらせて笑う。

「常人なら死んでいた。よく急所をかわしたものだ」

エロスはシューターにゆっくりと近づきながら言った。

シューターが、負けた？

俺は目の前が白みを帯びてちかちかした。おやじの体の重さ、体温も、目の前の光景も、時々聞えるミユウちゃんの啜り泣く声も。すべてが夢の中の出来事のように浮遊した感覚になる。

実はシューターが喧嘩の達人で、大逆転が待っている、とか。ここでカエルが仲間を引き連れて登場する、とか。そんな万に一つもありえない想像をしてみたが、どう考えても逆転はできそうになかった。

終わった。俺はこの後、殺される。

せめてミユウちゃんだけでも、ミユウちゃんだけでも逃がさないと。俺はミユウちゃんの方を向いた。

「きやつ！」

自力で縄を解いたのか、門下生がミユウちゃんを抑えつけるところだった。

やめろ、やめろ、やめろ。

声はでなかつた。目の前の光景が、どうも嘘のようを感じた。すっと気が遠くなっていく。

「その女子に触ることは、拙者が許さんぞ！」

弁慶が仁王のような顔で門下生を睨みつけたが、門下生はへらへら笑っている。

「もう終わりだよ。エロスさんは弾がなくつたって、十分強い。怪我をしたお前なんてちよろいもんさ。安心しな。女は女の使い道がある。お前たちのようにすぐに始末はしないさ」

ふざけるなつ。

飛びそうな意識の中、俺は頭の中で叫んだ。

「銀玉はかわしたぞ。この勝負は、俺の勝ちだな」

エロスはシューターの目の前に立ち、言った。

と、次の瞬間、エロスがぐにやりと曲がり床に不自然な態勢で崩倒れた。

「やっと効いてきたか」

こんどはシューターが立ちあがつた。

一体何が起きているのだろう？ 僕は消えそうな意識を必死で保ち、成り行きを眺めていた。

「お、お前、俺の体を、麻痺させた、のか」

エロスが絞り出すような声で言った。

「ああ。麻酔銃だ。確かに銀玉をかわしたあんたは凄い。けど、残念だったね。僕は二丁拳銃の名手だ」

ぱん。

シューターは言い終わると即座に、時計の十時十分のように両腕を伸ばして、銃を放った。一発はエロスへ撃ちこんだ。

「痛い！」

もう一発はミュウちゃんを抑えていた門下生に銀玉が当たつた。

「おい、エロスは負けたぞ。お前も全身マヒさせて動けないようにしてやろうか？」

門下生はその言葉を聞くと、体をこわばらせ、ミュウちゃんを離して後退した。そして両手を頭の後ろに回し、無言で降伏を示した。

「よし」

シューターはもう一度エロスの方へ向くと、恐らく麻酔銃の方だろう。五発連続で弾を撃ちこんだ。

「ぐ、が、……が」

もはやエロスは言葉もしゃべることが出来なくなつた。

勝ったのか。勝ったのだろう。エロスをやっつけたのだ。けれども先ほど強烈に感じた敗北感がまだ拭いきれず、勝利を確信することができなかつた。

「あの、シューターさん。傷は大丈夫ですか！」

シューターは割とけろりとした表情で俺を見て笑つた。

「ああ、ハカセ特製の防弾チョッキを着てたからね。けど、弾は当たつた。その衝撃はいてーよ。さて、戦利品、戦利品」

そう言ってシューターはエロスの銃を奪い取ると、俺の方に近づいてきた。

「パンダマン、大丈夫か、意識はあるか」

シューターの肌を見ると、想像以上に若いことに気付いた。もしかしたら十代かもしれない。

おやじは何も答えなかつた。弛緩した体は重く、俺はおやじの死を感じていた。

「蘇生術でなんとかならないか。救急車を呼べないか」

俺は首を振つた。もしかしたら、助かる可能性はゼロではないのかも知れない。けど、俺はこのままそつとしておいてあげたかった。

「いいんだ、もう。おやじは最期に気付いたんだ。自分の人生は間違いじゃ無かつたって。無意味じゃなかつたって」

涙が流れていた。安心したせいもあったかもしれない。あまり、悲しいという気持ちは無かった。

「そうか。パンダマンは言っていたんだよ。このヤマがうまくいって、雲運運団の取締役まで伸し上がれば、大手を振って家族を迎えに行けるってね」

「えっ？」

シユーターの目は優しかった。たぶん、年下だけど、俺の何倍も落ち着いて見えた。

「雲運運団は非営利組織なんだけど、取締役にはその団体維持の為にかなりの時間を犠牲にする関係があって、団員や寄付から集まった集金から、わりに少くない額の月報が支払われるんだぜ。普通のサラリーマンをやるよりも割がよくなるからね。幹部の中でも取締役を狙い、脱サラしようとする人間もいるくらいだ。実質パンダマンはフリーターだったからね。雲運運団の中で取締役になりたいという気迫は人一倍だったよ」

「そうだったんですか。おやじ、俺たちのこと捨てたと思ってたけど、根っこの方ではちゃんと見捨てず考えててくれたんだ」

「君を利用して宝くじを手に入る。それを考えると確かに酷い親だよね。僕もそう思う。でも、その宝くじが全部自分の為だけに考えてたものではなかったんだよね。きちんと雲運運団という組織のことも考えてたし、その先にはちゃんと家族のことを考えてたんだよ。パンダマンはちょっとびりバカで不器用だったけど、いいやつだった。僕は好きだった」

おやじの体をぎゅっと強く掴む。俺は何も言えなかった。

「さて、長居は無用だ。ずらかろう」

「御意、同意見でござる」

弁慶がミユウちゃんと共に傍に来た。

「さっきの門下生は、弁慶さんが縛り上げ直してくれたよ」

ミユウちゃんの声のトーンはいつものハイテンションじゃなかった。ちょっと、俺に気を使ってくれてるのかな。

「そう、よかった。無事で良かった」

「隼人殿、堅次殿の始末はそれがしに任せられよ。拙者も仏門に下る一員なれば、力になれよう」

「うん。ありがとう、弁慶。けど、お願いがあるんだ」

「願いとは？」

俺はひとつ大きな唾を飲み込み、言った。

「行方不明の無縁仏として、葬って欲しいんだ。いや、勘違いしないで欲しい。母さんに、おやじが死んだことは知られたくない」

弁慶は沈思黙考すると、「委細承知」と言っておやじを持ち上げた。

弾丸が埋まってるだろう足は痛くないのか、普通に歩いて出入り口に向かう。シユーターも歩き出した。

「あ、宝くじ、返しますけど」

シユーターがくるりとこっちを向き、にっこり笑った。

「取つときなよ。パンダマンからのプレゼントみたいなもんでしょう」

そういうと、前を向いて俺に背を見せながら手を振った。クールだ。

少し持ち直した意識では、まだふらふらするけれど、俺は必至で足に力を入れて立ちあがった。左を見るとミユウちゃんが俺に手を差し出してくれていた。

「ハヤト、よく頑張ったね。さ、一緒に帰ろう」

俺はミユウちゃんの手を握った。今にも壊れそうなくらい、柔らかな手。その手のぬくもりに、俺は確かに息づく命を感じた。

あまりにもいろんなことがありすぎた一日だった。

「うん、帰ろう」

日常へ。ただ、普通の暮らしへ。今までなんの変哲もなく、気だるいものを感じていた日常が、今では手に入りがたい、きらきら輝く宝石に感じられた。

(そして物語はエピローグへ続く！)

## あとがき

---

しろあです。

やれば時間がかかるわけではないんですが、何分面倒くさいのがパブーでの本の発行です。  
実際の本の発行のことを考えると、何がだ？！と思われるかも知れませんが、

例えるなら、

プールに行って、いきなり冷たい水の中にざぶんと入る。  
そんな気持ちに似ています。

入ってしまえばどおってこと無いんですけど、入った瞬間のあの冷たさ。  
それが、一気に全身に！ と考えると、「せ～のっ」って言いたくなるでしょ？

パブーの本の発行ってまさにそんな感じなんです。  
だから別に大変でもないんですけどね。  
特に請われているわけでもないので、……と思ってると時間が経ってしまうんです。

けど、エピローグは乗せなくちゃ。エピローグは乗せなくちゃって思ってて。  
気が付いたらもう秋も半ばじゃないですか。  
そろそろきちんと完結しないことには、作品にも可哀想だ。

ということで、今回一気にぽんぽん！ っと発行します。  
これで私も気持ちが楽になります。

ではでは。エピローグでお待ちしておりますよ～。